

親の仕事を見つめる

母のこと

越山純一

他の人も知つてのとおり、僕の母はすでに死んでしまつてゐる。死因は今ひとつわからないらしく、脳がだめになつてしまふ病気だつたらしい。母は父と同じく、散髪の仕事をしてゐた。母は定時制の高校に通いながら働いてゐた。そうだ。(何をしていたかは聞いていないが)

一度だけ聞いたことがあるのだが、父が理容の免許を持つてゐるので、母は必要なかったはずなのだが、母も一生けん命勉強し、同じように免許をとつたのだという。

父は何度か入院をしているが、母はお客がへるのはいへんだということ、一人で店をやつてゐた。しかし、母は理容の免許はとつたが、パーマのやり方はまた別で知らなかつたので、パーマのお客をことわるのがつらいといつ

ていたこともあつた。

僕は父と母がいつしよに働いてゐるところを見たことがある。二人ともすばらしい人だと思つてゐる。そして、母は努力の人だつたと思つてゐる。

母のように、定時制の高校に入りながらとまではいかないが、父の仕事ができるだけ手伝えるようになりたい。

僕の両親

吉野勝彦

僕の父は自動車整備工場で働いてゐる。母は看護婦をしてゐる。

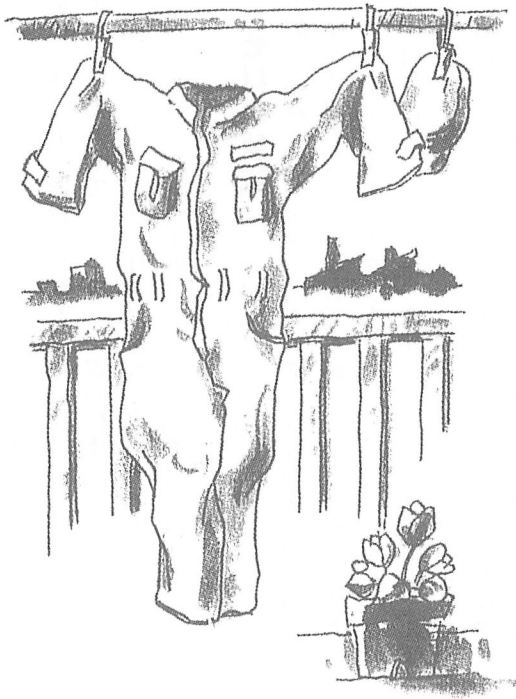
父は中学校を卒業してすぐに、会社の人のところに住み込みに入った。母は高校卒業の時には、寮の生活を

していたそうだ。住み込みにしても、寮生活にしても、他人といつしよに暮らすのだから、神経を使ったと思うし、気持ちが悪らぐときも少なかったと思う。そんなところから気持ちや心もきたえられたと思う。今の両親の気丈夫なところも、そこからきたのだと思う。

父も母も専門職なので、学校を出てもすべてをから始めなければならなかった。入ってすぐに仕事に取りかかれるというわけにはいかない。そのために、父は自分で見たり聞いたりして仕事を一から覚えたそうだ。一から覚えるというのは、簡単なことではないと思った。僕はかけ算の九九を思い出した。最初は一の段から九×九＝八十一までが果てしないように思えたが、今では計算の基盤になっている。

両親の職業は、近所の人たちには知られているようで、家にいるときでも、よくあれやこれやとたのまれることがある。両親は、これを快く引き受ける。そんな両親を見て、多くの人に影響を与えていると僕は思う。それは、子ども

である僕と僕の姉にとってもそうだ。僕の姉は今、母と同じ職業を目指して勉強をしている。僕は具体的な方向はまだ定まっていないが、将来を考えるとときには、必ず父のよきな仕事の中の一つにあげられる。



親の仕事を見つめる（中学校向け）

A 教材設定の意図

小学生時代にも将来の夢を考える機会があっただろうが、中学生になると、自分が将来どのような職業につきたいのか、あるいはどんな職業があるのか、より具体的に考える機会がふえてくる。ほとんどの中学校で、進路学習という形の中で、職業調べなど、いろいろなとりくみがなされているはずである。

多くの中学生は、テレビや雑誌などを通して抱いた実感のないイメージや、自分自身の興味・関心に大きく左右された目で、将来つきたい職業を考えている。そうした中で、社会にどのような職業があるのか、その職業につくにはどうしたらよいのかなどを学び、場合によっては実際の職場での体験学習などで「仕事」というものの具体的イメージをつちかう実践が行われている。

「親の仕事」については、身近なおとなの職業ということで、話を聞いてくるとりくみが行われているが、それが単なる職業紹介に終わってしまつては、生徒自身の内面に響かない。「親の仕事」を、家族の一員として内側から見つめたとき初めて、その仕事につくまでの苦労や努力、家族の生活を支えるための思い、親の生きる姿が見えてくるはずである。

そうしたとき、それは職種のひとつとしての「職業」ではなく、生活をともなつた「仕事」として浮かび上がってくる。生徒たちは華やかな職業、収入の高い職業、時代の先端をいく職

業などに目が行きがちで、そこに職業差別につながる芽がある。地道な仕事でも、家族の生活を支える重要な仕事であり、努力や苦労の結果としてあるとき、「親の仕事」に誇りを持つことができるだろう。「親の仕事」を見つめ、それぞれの生徒が自らの力で生き方を探る手助けとして、本教材を設定した。

B 教材の解説

本教材「親の仕事を見つめる」は、自分の仕事を大切にしながら生きる親の姿と、親の苦労を感じながら見続けてきた二人の県内の中学三年生の作文をもとにしている。

越山君の作文は、彼が持つ課題について担任が話しこんでいく中で書いてきたものである。中学一年の時の母の死もあつて揺れ動いてきた越山君が、中学校卒業を前にして、両親のことを振り返りながら、自分の生き方について書いたものである。

越山君の父母は、時には夜遅くまで、また昼食もとらずに客に頼まれて仕事をやる。そんな父母の体を気づかいながら、人々から信頼されていることを誇りに思う彼の気持ちを讀みとらせた。

この作文を使って、担任はクラスで生徒一人ひとりが自分の親の職業・生き方を振り返り考える授業を行った。この授業の中で、吉野君は家族を支えてきた越山君の両親と、自分の両親を重ねて作文を書いた。

生徒たちの職業観は、少なからず社会の「常識的」な価値観を反映している場合が多い。二人の親は、高い学歴を必要としたり、多くの収入を得るような華やかな職業ではない。理容師、自動車修理工、看護婦というように、社会の土台を支える仕事をする、二人の親の生き方を生徒たちに考えさせたい。

なお生徒たちが、各自の父母の労働に目を向け、つづることを指導したい。その際、授業者が、自分自身の親の生き方をどうとらえてきたかを、親の職業も含めて生徒たちに伝えられるようにしておきたい。

C 指導上の留意点

- ① 何らかの理由で両親または、一方の親がいない生徒がいる場合、前もって授業の意図を話しておくなど、つらさばかりを味わわせることのないよう配慮してほしい。
- ② 現在仕事についていない親がいる生徒に対しては、仕事をしていないという状況ではなく、その理由に目を向けさせるような指導をしてほしい。
- ③ 進路指導にもつなげることができると思うが、教材設定の意図からはずれることのないように留意してほしい。

本教材を使った授業から

◆「つらい」「大変だ」「すばらしい人」と簡単に表現し済ませているが、この中の一つだけを取り上げた内容の方が、深まりのある教材になったと思う。(珠洲)

◆改めて親の仕事を見つめ、そこから進路を考えるとという点では、適当であった。(珠洲)

◆ふだんなかなか両親の仕事について考えてみたことのある生徒が少ないと思う。親の仕事の苦労などを改めて考えられる教材であり、親のすばらしさを感じることができたのではと思う。ただ、両親のいない生徒にとっては難しいものがあつた。(石川)

D 授業の展開例

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① 将来つきたいと思っっている職業、あこがれている職業をあげましょう。</p> <p>二 展開</p> <p>② 教材文を読みましよう。</p> <p>③ 二人の作文で、父母が苦労したり、努力した姿が書かれているところに線を引きましよう。</p> <p>④ どこに線を引きましようか。</p> <p>⑤ そういう親の姿をこの二人はどんなふう</p>	<p>① 現在脚光を浴びている職業が多くあげられるだろう。</p> <p>② 生徒を指名して読ませる。</p> <p>③ 二人とも親の姿をよく見ているので、線を引く箇所は多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 母は定時制の高校に通いながら働いていたそう。 ・ 母も一生けん命勉強し、同じように免許を取ったのだという。 ・ 母はお客がへるのほたいへんだということで、一人で店をやっていた。 ・ パーマのお客をことわるのがつらいといっていた。 ・ 父は中学校を卒業してすぐに会社の人の所に住み込みに入った。 ・ 母は高校卒業の時には寮の生活をしていた。 ・ 父は自分で見たり聞いたりして仕事を一から覚えた。 <p>④ 線を引いたところを発表させる。</p> <p>⑤ ・ 二人ともすばらしい人だと思っっている。</p>

とらえていますか。わかるところに線を引
きましょう。

⑥どこに線を引きましたか。

三 まとめ

⑦みんなも「父の仕事」「母の仕事」という
テーマで作文を書いてみましょう。

- ・今の両親の気丈夫なところもそこからきたのだと思う。
- ・一から覚えるというのは簡単なことではないと思った。
- ・多くの人に影響を与えていると思う。

⑥親の仕事は決して華やかなものとはいえないが、二人が地道に、誠実に生きる親の姿をしつかりと見すえ、誇りを持っていることをおさえる。

- ・父の仕事ができるだけ手伝えるようになりたい。
- ・僕の姉は今、母と同じ職業を目指して勉強をしている。
- ・将来を考えるとときには、必ず父のような仕事がその中の一つにあげられる。

⑦親の働く姿、そこでの喜びや苦労、願いなどを見つめ直し、あるいは想像させて文をつづらせたい。日常的に親の姿を観察したり、話を聞き取ったりしていない生徒には、時間をかけて指導する必要がある。作文を生徒個人のものとして終わらせるのではなく、ぜひ学級全体のものにしたい。